

ゼミをアクティブに!

芝浦工業大学 数理科学研究会
林 愛彩香

平成 26 年 5 月 7 日

1 研究内容

私の所属する数理科学研究会 (以下, 数理研) は他学部や他学科の学生を迎えながら年々大きくなっている. しかし, 組織が大きくなる一方で数理研内のシステムは旧来のものからほとんど変化していない. そのため, 多くの局面で不都合が生じている. 特にゼミでは, うまくいかない状況が散見されるようになった. この状況を打破すべく, 数理研の活動について今一度考えてみたい.

2 ゼミの意義, 期待される効果

わざわざ自分の時間を割いてまでゼミを行うことによつたような効果があるのだろうか. ここで一度整理しておきたい. なお, 今回考察するのは輪講というスタイルである. 毎週 1 人が講師役となり決められた本の数ページを解説する.

1. 参加者共通

- 学習内容に興味をもって学ぼうとする姿勢が身につく.

2. 講師役

- 人に教えるために習得した知識は忘れにくい.

3. 受講学生

- 授業外での学習の時間を意識的に確保する.

3 ゼミにおける問題点

スタイルは確立されているにもかかわらず, うまく機能していないと感じる原因はどこにあるのだろうか. 問題点を明確にするとともに, 目指すべく方向を定める.

- 学年が上がるにつれて趣向が分かれ, 共通部分が狭まってしまふ. 言い換えれば, モチベーションが低い分野に手を出さなければならない.
- 他学科の授業内容を把握しきれていない.

- 学年をまたいで実施する場合は, 実施日の調整に苦労する.
- ゼミの実施自体が半強制的なものであり, 動機が外発的である.
- 活気がない.
- 一つのゼミに対して, 人数が多すぎる.

これらが現在表だって確認される問題である. カリキュラムや大学の制度上やむを得ない点もあるが, ゼミに対する動機や雰囲気については改善可能と考えた.

4 数理研の特徴

数理研の良さを発揮できるゼミのスタイルを確立したいと考えている. そのためには, 数理研のことを知らなければならない.

- 勉強すること, 特に数学に関しては意識が高い学生が多い.
- 数理科学科の文化で物事を進める.
- シャイな学生が多く, 言われないと行動しない場合が多い.

学年ごとにカラーがあるものの, これらのことは全体に共通していると言っても過言ではない.

5 今後の課題

数理研の活動は言わば, 自主ゼミである. にもかかわらず, 主体性に欠ける部分があり全体的にうやむやになってしまっている. 長続きする制度と, ゼミ目的に入学してくる学生が満足するものを考案したい.

参考文献

- [1] Biggs and Tang, Teaching for Quality Learning at University, Open University Press Imprint, 2007.